

Title	いづれがあやめ、かきつばた
Sub Title	
Author	石山, 皓一 (Ishiyama, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.498- 501
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0498

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のだろうか。私は長沢さんにたづねた。

彼は冬の夜空の星を眺めながら、

「さあ、押しかけ私設秘書かな。いや、秘密の秘書かもしれない。」

とうそぶいた。その後、私は再び彼女に会うことはなかった。

長沢さんは、昭和五十三年に、忽然となくなった。群星一つ墜ちて、数多い奥野先生の伝説をききただす友を失った。

(写真家・昭和十九年卒)

いづれがあやめ、かきつばた

石山 皓 一

一旅宿の隠居にすぎぬ私のような者が、畏友村松、藤

田の両君について語るなど、いささか出過ぎの観がないでもない。

村松君は硬骨の士である。いや、外柔内剛の人といふべきか。

昭和十八年の夏、予科の修学期間を半年繰上げ、私も予科三年生を無条件で学部の一学年に進めるといふ奇怪な事件が起った。そのために、たまたま私は村松、藤田両君と同級になるといふ幸運に恵まれることになった。

学部の教室に出席するためには、現代中国語の基本くらいは学んでおかなければならない。当時登校することさえオックウであった私に、村松君はどんなに中国語の予習教室へ出席するよう繰返しすすめてくれたことだろう。せっかくの親切を無にして逃げ廻った私が、戦後生き残って復学したとき、早速ムクイを受けたことはいうまでもない。宮島先生の教室へ出てみると、老子の文章

を中国語で朗読させられる授業なのであった。三松哲夫君のひそかなる援助も私には何の役にも立たないのであった。

同じ昭和十八年の秋、学徒動員令なるものが下り、今度は仮卒業という妙な特典を与えられ、学部の大半が軍隊へもってゆかれることになった。中国文学科の学生といえども例外ではなかった。

このとき、中国文学科の仮卒業者たちの出征歡送会に私をつれて行ってくれたのも、村松君であった。学校をサボってばかりいた私は、先輩はもちろん同級生の顔もろくに知らなかったのである。

怠惰なくせに酒だけは一人前だった私は、会場である柳橋の料亭の酒だけでは満足できないで、その席で初めて知り合った先輩の芳賀日出男氏に誘われるまま、夜の道を田園調布までお伴して行ったのであった。てっきりパーか何かに案内されるものとはかり決めこんでいた私は、案内された先が、いくら芳賀氏と懇意とはいえ、ま

さか作家石坂洋次郎氏の留守宅とは知らなかった。当時石坂氏は徴用か何かでフィリッピンへ出掛けておられたのである。

石坂夫人にうながされるままブランデーか何かの盃をあげているうちに、キュウクツさがつのってきたことはいうまでもない。いつ辞して去るべきか、そんな思いだけが胸中を去来していた。

戦後私は、奥野先生のお世話で、新橋の苦楽社という出版社に一時期勤めていたことがある。苦楽社は私が勤めはじめから、わずか一年足らずで倒産してしまった。社主の大仏氏が天馬という名の青少年雑誌を、九十九パーセントの返本率にもかかわらず、意地になって出しつつけたせいである。従って私が入社した頃から、執筆者に対する原稿料の支払いが滞りがちになっていた。ある日、社の屋上を無言でひどく憂鬱そうに歩き廻っておられる方を見かけたので、同僚にきいてみると、それは村松梢風先生、つまり村松君の父君なのであった。かけ

出しとはいえ、私は穴があれば入りたい気分であった。

しかし私が、村松君とほんとうに心を許して語り合うようになったのは、世が挙げて中国の文化大革命礼讃にふけている最中に、村松君がひとりカンゼンと立って批判の声をあげた頃からである。以来私はこの畏友の一人を心から誇りに思っている。

藤田君がその飄々たる外貌にもかかわらず、謹厳実直の人であることは、すでに広く世の定評となっているところである。

藤田君にも、私はどのくらいお世話になったかわからない。藤田君にしてみればさぞかし御迷惑だったことだろうが、亡妻が愚息を藤田君の寺へあづけ、感化を受けしめようと熱望したのも、一目でその人柄に傾倒したからに他ならない。

誰の発案であるかは不明であるが、あるとき中文の学生が、奥野先生をはじめ藤田君、村松君と共に、私ども

の旅宿に一夜の泊りを試みてくれたことがある。

感激した亡妻は、その夜の宴席に、サービスとして、ストリップショーの一座をよんでもてなした。それが藤田君の心を悩ましめたことはいままでもない。

「石山君、せっかくだがね、あれは困るよ。相手は学生ではないか」と早速おしかりを受けてしまった。

しかるに、その翌年の夏であったか、私どもは夏休み中の小学生客のために、宿題教室なるものを立案し、藤田君に臨時家庭教師として、アルバイト学生を世話してくれるようになったので、藤田君は早速二人の男子学生と、二人の女子学生を差向けてくれた。ただし、「石山君、今度こそは注意してくれ。学生が悪習に染まるようなことだけはないうにね」

私に学生の監督などできるわけがない。しかし、幸いなことに、彼等四人はもともと悪習に染まるような自堕落な学生ではなかった。仄聞するところによれば、彼等四人は現在それぞれ社会人として立派に活躍中とのこ

と。藤田君の寛容な好意を思うにつけ、ひそかに胸をなぞおろしている次第である。

(つるやホテル会長・昭和二十一年卒)

丙種合格

岡本 宏

村松先生とは教師と学生という関係が始まり、三十五年もお付き合い戴いたわけだが、改めて顧みると、私は先生から面と向って窘められたり、注意を受けたりした記憶は全くないし、人生の先輩が時に披瀝してみせる教訓めいた話や人間談義、さては処世術の類も殆ど聞いたことはない。だから、普通学生が教師に接する時に多少なりとも持つ硬さ、ぎこちなさ、真面目そうに装うことなどは、先生に会っている時は殆ど意識化されなかった。

何の構えもなくお話できた。些か失礼だが、その意味では先生は凡そ貫禄はなかった。「萌木」という女子高の雑誌に寄稿された一文に、「女房はよく、『あなたって人はいくら年をとっても貫禄がついて来ないわね。』という。」とあったのを憶えている。

世俗的な貫禄のない先生は、だからこそどんな人にも会っても絶対に差別的な目で見なかったし、誰に對しても同じ態度で接しておられた。外見、地位、年齢、性別、その人との関係などで、つい人との対応を変えてしまう私などにとって、こういう先生は畏敬を感じるといふより、寧ろ脅威でさえあった。何故なら、その度に人間の資質の違いと育ちの悪さを否応なく感じさせられるからだ。

「私は、軍隊はね、丙種合格ってやつでね。ご存知のように丙種なんてのは、もともと兵隊の資格などはないんで、戦時でもなければ、軍隊に行かないんですが、敗色濃厚の時で無理矢理召集されたんです。まあ員数合わ